



刊 行 を 祝 す

「安積野を開拓するのは新生日本の急務」との信念から時の政府を動かし、「開物成務」の使命を具現しようと、明治六年、当時荒涼たる原野であった安積平野の一角、大槻原の離森の地に開成社が創立されたのであります。

以来開墾事業に熱情を傾けられ幾多の困難辛苦を経て、同八年には田畑四四〇ヘクタール余りを開墾したほか、配水池としての開成沼をはじめ道路等の新設をなしとげ平地には水田、台地には桑畑がひらかれたのであります。この成果は、国土地改良史上特集される安積疏水開さくのひきがねとなり、その後の安積開拓に大きな役割をはたしたのであります。

安積平野の開拓は郡山地方の発展をもたらし、名実とも本県産業経済の中心地たる現郡山市実現の原動力となつたばかりでなく、本県産業経済の発展に大きく寄与したのであります。私はこれを高く評価するものであります。もちろんこの事業は一朝一夕にしてなしとげられたものではなく、このかげに開成社創立に参画された先覚者の私財を投じての献身と、その志を継がれた後継者ならびに関係者の日夜をわかつたぬ、ひたむきな努力と熱意があつたことを忘れることは出来ないのであり、その功績の偉大さに、私は、ここにあらためて深く敬意を表する次第であります。

このたび開成社創立百周年を迎えるにあたり、これを後世に伝えるため、百年史を編纂発刊されることは、誠に時宜を得たものであり、先覚者の志に報いるためにも意義深く、心からお祝いを申し上げます。

どうか、これを機に先覚者の志を志として地域の一層の発展のため、御活躍されるよう期待してやみませぬ。ここに先覚者故人の遺徳をしのびつゝ、本誌発刊のお祝いの言葉といたします。

昭和五十年三月

福島県知事 木 村 守 江



お祝いのことば

このたび開成社創立百周年記念にあたり、「開成社百年史」発刊をみるに至りましたことは、誠に意義深く、私の最も欣快とするところであります。

今や安積野は一望千里、肥沃美田に掩われ、豊穰を謳歌しておる今、遠く往時を偲べば隔世の感を禁じ得ないものがございます。惟えば、見渡すかぎり荒漠として狐狸鳥獸のみの棲息地、大槻原に明治六年、明治政府の国策を体し、故阿部茂兵衛氏ら二十余名の志を同じうする者相集い、開成社を設立、卒先して鎌、鍬にて挑み、同八年に至り、四百余町歩の開拓に成功、一部落を形成し終え、桑野村を建設、同九年その業績上聞に達し、六月十日明治大帝の開成館聖駕を見たのであります。

爾來有志の団結は愈々固く、その旺盛なるフロンティア精神は飽くことを知らず、明治十二年六月より同十五年完成に至る日本三大水利事業の安積疏水開鑿の偉業を翼成し、天恵の湖猪苗代よりの導水を成功させ、乾燥無味の安積平野を一朝にして沃野千里の一大富源となし、郡山市発展の礎を築かれたのであります。

百年後の今日、この疏水の水は有機的に活用され灌漑用水はもとより上下水道、工業用水、水力発電にその真価を発揮し「新産業都市」から「緑と太陽の文化都市」へと躍進を続ける郡山市のエネルギー源となっておりまことは、これ偏に本社を創立された諸氏が、一家の私事を忘却し、国利民福を優先されたる一大恩恵でありまして、その遺産に対し深甚なる感謝の意を表するものであります。

時恰も、急速に増加する人口と産業形態の変遷による水需要の増大から新たに墜道の掘鑿を余儀なくされておる現在、

先人諸氏の先見の明、英知と勇断に只々感嘆の念を禁じ得ないものがあります。

高度経済成長とは裏腹に、人情紙より薄く、社会連帯意識の欠如を来しておる昨今、貴社の公正無私精神は、一服の清涼剤として、我々市民の反省を促して余りあるものがございます。

どうか、父祖の偉業とその精神を承継された現社員の皆さんは、益々奮励努力されまして、本社の隆盛はもとより、市民の規範として、東北開発の拠点都市郡山の市勢発展に寄与されんことを祈念し、本書の発刊の祝辞といたします。

昭和五十年三月

郡山市長 秀 瀬 日 吉



記念誌の発刊を祝う

明治維新は近代日本の出発点であり、同時にそれは郡山の夜明けでもあった。

白河以北、百文といわれた未開発地東北、郡山はこの東北の入口にあって奥州街道の小さな一宿場町、明治初年には人口五千人にも満たなかった。

今、郡山市は人口二十六万。広大な安積平野の美田を背後にした市街地には近代ビルが林立し、農工商一体の南東北ずいの一の大都市としての位置を確立している。

このように発展した郡山を考えると、嘗って狐狸の住む安積原野、開拓の歴史を抜きにして語ることは出来ない。開成社はこの地に住む有志の人々によって結成され開拓開墾の大事業に取組んだ民間側の主役だ。水利の便なく、地質劣悪な荒地を相手に開墾事業を興すことは極めて冒険であったが巨費を投じ参加した人々は、村を愛し、地域の発展を願う一念からであったと聞く。

その先人の先見、勇氣、郷土愛、今は郡山の礎石になったことを思うとき、改めて襟を正して偉業を迎えざるを得ない。以来、一世紀、郡山市は今、高速時代を迎え更に新時代第二の発展期を迎えているとき、開成社社員の後継者の方々が開成社百年史を出すということに、誠に意義深く深甚なる敬意を表したい。

昭和五十年三月

郡山商工会議所

会頭 若 月 定之助

発刊を祝して

郡山開発の発祥ともいふべき開成山の開拓が、明治の黎明を迎えて、明治六年開成社員二十五人の出資によって、この地一帯に開拓の鍬が入れられてから、明治・大正・昭和と百年の歳月が流れた。

当時の開拓村桑野村（開成山地区）は、現在郡山市の新しい核として大きく発展している、かつての貧しかった農民の住居はどこにも見当らない。当時開かれた道は四十九号線に生れ変わり、乗用車の列は南から北に絶え間なく流れている。まさにその発展は目をみはるものがある。

このとき、想を遠く百年の昔にはせ、開成社の創業の偉業を追懐することは、郡山市民にとっても意義あることである。

今回、開成社員の子孫の方々によって、開成社百年史の出版が企画され、斯道の大家、橋輝政氏が、往年の健筆をふるわれ、この編著の労をとられることになり、ここにこの稿本が完成した。

私はこの稿本の全文に目を通ずる機会を得た次第である。資料の収集、配置等誠に適切であり、とくに内容に至ってはあの難解といわれた「開成社記録」全巻に目を通され、かつこれを平易に解説、創業当時の開成社員の開拓への苦闘を資料に忠実に且つ客観的にとらえ、あますところなく解明している。

この書は、開成社の私史ではあるが、一面郡山の歴史の貴重な資料でもある。今回、資料を収集、意義ある出版を完成された開成社員の子孫の方々、並に編著の労をとられた橋輝政氏に対し、衷心から感謝の意を表し、併せて、この書が市民の方々に読まれ、先人の偉業を知るとともに将来の郡山を築く上に、何らかの役目をはたすことを、心から期待し、この書を広く江湖におすすめる次第である。

昭和五十年三月

序

合名会社 開成社社長

鳴原彌作

明治六年創業の開成社が、多少でも収益をみたのは、大正年間に入ってからであって、それまでは開成社資金金額に政府と県融資と物産方借入金等通計十万円を越す資金の一方的投入であった。出資したけれど一升の米一銭の利潤も返ってこない。その上家業を捨ておいて作業監督等開墾所通いの無償奉仕である。社員中にはしびれをきらして脱退を言いだすのもいたのは無理ならぬことであった。十年二十年と経過する間には、家運の不況から社員付合を困難にしたかも知れない。しかし、その苦しさによく堪えて結局は最後まで二十五社員は結束し、百年の歴史を貫いて現在に至り得たのである。この結束と社業の永続は、社長や社長並等役職者の力でなく二十五人銘々の平等不偏の犠牲と辛抱強い報国報郷の精神の結晶に外ならないのである。同時に今日三代乃至四代と隔ても歴史ある開成社子孫の名を専らにする私共は、創業の祖霊に襟を正し深く頭を下げねばならぬ。

報いられない開拓も大正明治以後生産的農地造成に進み、田圃と菜園に大別された開拓地の大半は小作契約の下に経営が維持されて当然地主となった社員等はようやく安堵の息をついたが、大正から昭和に、幾たびか夷り秋を迎えているうち、太平洋戦争となり、敗戦の終結となる。米国占領軍は再び日本の立ち上がれぬよう政治経済、資本解体、農地分散化等、総ゆる面での改革を命令された。

農地改革では所謂大地主はなくなり、開成社員は一町二反歩限度の小地主にされた。

当時開成社員は、各自既得の土地を桑野地内に所有していた。これは先祖が営々努力を傾け開拓した貴重な遺産であるが、規則を越えた余分の地はいすれも強制買上げに付され小作人の手に渡った。

当時の時価の百分の一に過ぎぬ強制買上値は、田一反歩平均四百円、畑一反歩三百円である。一反歩は三百坪なり、小作人貸家宅地付一戸五十円、例へば桑野地区内での鳴原家強制買上は田畑五十四町五反五畝、即ち十六万三千六百五十坪、宅地付貸家十戸である。その後飛躍的経済成長が続く中で、新産都市圏に入った郡山の地価は急高騰し、郡山市役所が旧開墾地中央に新築されると同時に、桑野の地価は一坪五万円と五十万円前後に高騰し、平均坪十五万円としても二四五億余円となり、小作人は各自巨万の地主にのし上った。

一方土地を取上げられた社員地主中には辛うじて破産を免かれ家名を維持、全く今昔逆転の異変である。このことについては郡山市発行の「郡山の歴史」は開成社地主が農地改革によって被った悲惨な状況は、行灯の火が落ちたも同様と伝えている。ただ僅かに慰めとするはこの苦難に堪えて開成社地主の払った土地開放の犠牲が郡山の画期的新発展に寄与し結社百年を貫く開成社精神に添うものであらうを思えばである。

従来、開成社の遺業を語る文書には初め二百余名の開墾希望者があったのが事業前途の困難を不安として、尻ごみ脱落し、最後に残った二十五人が犠牲を覚悟で郷土開発のため決起、国策奉公への至高目標に向って同志の誓いを結び、開成社結成に進んだと記されてある。

志を同じくし目的を等しくした開成社は結成当初から社員の立場は平等不偏であった、団体運営上社長や社長並等の職名があっても、それはあくまで組織の便法であって社員の使命感を差別するものものでない、結成の日の平等な同志愛を基調として、幾多の困難に耐え出費総額十万円余という現時の評価で千億円に匹敵する巨資を負担して百万余坪（三百三十万平方メートル余）の田畑開拓を実現した、しかも、この拓地の大部分も農地開放旋風によって一片の国債と交換で吹飛んだは右に述べた通りであるが、この変革にもめげず開成社員一同は郷土開墾に発した父祖の遺業を体して退勢の挽回に不屈の力を傾けつづけ、よく家門を堅持してきた。

今や旧桑野地域は風致区開成山を抱いて二大国道に沿え、新市庁舎を始め、県市宮体育館の高層建築、一般商店、住家、大小ビルが櫛比し、桑園や田圃は次々と市街地化された。市庁舎の景観を含めてこの全地域をおおう

無限の功用化は開成社創業の意図を表徴するものである。さらに無限の展開を約束される同地一帯は、郡山市地図に描く位置そのままに市中央繁華街として前進の一途にあり、この現実にあまふまへ、開成社創成の難業に思いは新たにほだばしる。時あたかも結社百年の世紀に当るこの画期的年光を記念するため、私共子孫一同は、開成社百年史の刊行を進めてきた。

開成社の名聞については、古くから口伝文籍に繰返され、現に郡山市史に詳述されているが、悠久なる祖霊に手向けて、開成社独自の百年史刊行を決定したのである。さきに開成社五十年記念帖刊行により、社業半世紀に應えているが、同帖は写真を主としたものであるに對し、今回は写真の収録に併せ、史料叙述に留意している編年体列記の章目に開成社の創基から現代に至る百年の歩みを示した。このために配慮した編者の労を多とし序文とする。

昭和五十年 春
